

# 六人の地域の宝が集う場所

金澤 妙子

子どもの表情に惹かれて

ゆずシャーベット―頂き物であるが、ここ十年来、わが家の夏の風物味になつてゐる。あるとき、それに同送されていたはがきに、そのことを記すと、丁寧な返事が来て、パンフレットが届くようになった。この夏、そのパンフレットのメインを飾つた三歳児がいた。女の子の脇にはへ正真正銘古座川町のひなた、男の子の脇にはへ正真正銘古座川町のようにすけとある。

ひなたちゃんは、ピンクの髪飾り・ピンクと白のボーダーシャツ・ジーンズ地のスカート・ピンクの靴下に、ピンクのスニーカー姿。手にはへ柚香ちゃんゆかを持つてゐる。へ柚香ちゃんとは、この地の特産柚子と、この地を流れる清流古座川の水で作つてゐるジュースの名称で

ある。小さな二の腕から手にかけて、まだどこかふつくらとして乳児の名残が感じられた。へ保育所お休みになつたよ。はずかしいけどがんばるから、後で柚香ちゃん飲んでいい？とある。まあ面白い顔にふくらしたはおは少し紅潮してゐるようにも見えて、緊張しながらも大人たちの要求に一生懸命応へてゐるように思われた。

ようすけくんはサッカー日本代表のユニフォーム、半パンツとスニーカーの白がまぶしい。へなんか、ぎょうさん人いて俺、ヒーローみたいやなあ。こうか。こうしたら、ええんか。どや、きまつたやろ。はよ撮つてや。の言葉のせい、いつもと違つて大勢の撮影関係者の前で、舞い上がつてゐる様子を想像させた。

製作者にのせられてゐるとどこかで自覚しつつも、子どもの表情は、こちらの想像によるへ緊張やへ舞い上



# そんなこんな 古座川の 夏だより。

保育所お休みの  
なつたよ。  
はつかいけど  
かんはるから、  
後、地帯ちゃん  
飲んでいる？

なんかきょうさん大いして  
焼ヒ一口みたりなあ  
ごうか  
こつしんええんか  
とやままとやう  
はよ通ってや。

はつて  
2000年  
かんはるから、  
後、地帯ちゃん  
飲んでいる？

▲訪問のきっかけになったパンフレットの二人

がり〜も含めて私にはとても魅力的で、この子たちは、周囲のみんながどこの子か知っている地域の中で育った子だなーと思われた。どんな所・どんな人の中で育っているのだろう…などと思いは膨らんで、パンフレットを手がかりに、この二人が通う保育所を探して出かけたのだった。

同じ県の保育者で、この保育所がある集落近くにお母さんの実家があるというHさんが、同行を買って出た。朝からの見学に備えて、前日、保育所の近くまで行き宿泊したが、多少の土地勘があるHさんと、「野菜はともかく、肉や魚はどこで買うのだろうか」「小学校や中学校にはどうやって通うの?」「高校は宿泊しなければ通えないのでは?」などと勝手に心配した。

みんなで六人、その保育の様子

町の人口は約三七〇〇人。その奥地七十戸ほどの集落に保育所はあり、五歳児二人・三歳児三人・二歳児一人が、三人の保育者と共に生活している。指定された九時

三〇分近くに伺うと、緊張気味の保育者が出迎えてくれた。

園児はまだ二人。十五畳ほどの部屋の楕円形のテーブルで絵を描いている子がいる。日さんがその子を、「ようすけくんじゃないかな？」と言うので本人に聞いてみると、「うん」という返事。見知らぬ人が来たからだろう、子どもは、私たちが誰なのか、何しに来たのかと聞く。「ようすけくんがへ袖香ちゃん」を持って写った写真を見て来た」と話すと、「柚子のジュースは、100パーセントほんまもんやよ」と五歳児。ようすけくんは撮影にまつわると思われる(事実ではないことが後からわかったが)ことなど、たくさん話してくれる。

そういうするうちに、パンフレット撮影時より、少しすらりと引き締まった感じではあるが、ひなたちゃんとおほしき子も登所し、持ち物を所定の位置にかけたりしている。どこでも見られる登所後の子どもの姿である。それが終わると保育者の所へ行って、折り紙をもらって来て折ったりしていたが、玄関続きのマットが敷

かれているフロアーの大型積み木やブロックなどで遊びだした男児たちの所へ行く。テレビアニメの『プリキュア』に武器があるのかどうか私は知らないが、なりきったつもりで、自分で作った鉄砲状のもので保育者を撃つまねをしたりして遊ぶ。二歳児とそこはかとなく仲間関係があるようで「いこっ！ ○ちゃん！」と誘っていた。

あつという間に子どもは全員そろっていて、一人が壁の少し高い所に貼ってある自分の絵について話すと、それぞれが自分の絵を知らせてくれるので、必要に応じて抱き上げて説明を聞いた。

「基本的に、こんな感じで過ごすのですか」と保育者に聞くと、「そうです」とのことだったので、何となく、ずっとこうしているような気がしていたが、十時になると、お片づけの声がかかり、使っていた描画材や絵本や遊具を保育者と子どもたちで片づける。終わると、各自、壁際に並んでいるいすに着く。いすにはそれぞれのマークと名前がついていて、ここが部屋の自分の定位置・場所のようだ。保育者に促されて、当番二人が前に



▲朝の会のひとコマ



▲みんなでプールの水を最後まで楽しんで



▲歌をうたってお弁当。お弁当は持参。  
お母さんは大変？ でも、子どもはうれしそう。

出て「起立」の号令をかけ、改めてみんなで朝のあいさつをし、出席をとる。壁にかかったカードで今日の日付・曜日を確認。保育者の弾くオルガンに合わせて、歌を何曲かうたう。その後、保育者がリードして場を変え、みんなでいくつかの手遊びを何回か楽しみ、本棚いっぱい絵本の中から何冊か読んでもらう。

保育者は、簡単なものからちよつと難しいかなと思う

ものを何冊か読んでいた。最後の一冊は『これはのみのぴこ』（谷川俊太郎・作 和田誠・絵 サンリード）。これを、最初保育者が読んだ後、二度目の途中から五歳児が読み、保育者はほかの子どもと一緒に見ていた。この絵本は、連続して漸増する言葉遊び的な要素が特徴的で、全部読み終えて、こちらがほっとした。二歳児もよく見ていてびっくりした。この二歳児も当番活動に興味

があつて、時には朝の会の当番をするという。易しい雑誌のときも、五歳児は退屈せずに中身を楽しんでいた。

選んだうちの一冊は保育雑誌で、へうたのえほんのページでは「おべんとうばこ」の手遊び歌を交えて二度読んだので短くない時間だったが、どの子も終始興味が薄らぐこともなく静かに聞き入っていた。

後にHさんは、「二歳児から五歳児なのでどうするのだろうと思つた」と言っていたが、保育者はいつも、易しいものと、ちよつと難しいものとを混ぜて読むようにしているようだ。

その後、子どもたちは体操をしてプールに入った。朝の会では（多分見ている私たちを意識して）、どちらがオルガンを弾くかで互いに譲り合っていた保育者も、このころには少し緊張がほぐれてきたように感じられた。

プールから上がり、トイレや着替えを済ませた子どもたちは、お弁当の入ったカバンを持ってテーブルを囲みだす。みんなでお弁当の歌をうたつてお弁当のふたを開けるまで見学した。

大正十五年生まれの私の父が九人兄弟だつたように、六人という数は昔なら兄弟数として多くはない。それでも、家庭における兄弟のような過ごし方で流れていくのではなく、一斉に朝の会をするのは、ここの保育者たちの保育（所）のイメージなのだろう。

子どもへの課題が、この保育所よりもっと多い園もあれば、登園してからお昼までずっと、思い思いに遊んで過ごす園もある。後者のように、遊びを通して子どもを育てていこうとする園では、どうあることが子どもにとって自然なことを考えて、保育者は心を砕く。園生活ですることになつていける事柄が、本当に子どもに必要なことなのかを一つひとつ検討したりする。その際、保護者の仕事の都合で園に来ているが、家庭にいたらどうかと考へてみることもある。低年齢ほど家庭との垣根はできるだけ低くと思つても、多くの子どもたちが集団で生活する場では、なかなか家庭にいるのと同じにはできないことが多い。

この保育所では逆だった。どれほど自覚的にしている

のかどうかはわからないが、家庭と同じようにできるかもしれないところを（あえて）やらない。

私は普段、乳幼児の生活に、このようにわざわざ一斉に集まってあいさつを交わす必要性を感じない。だが、自分の場所に着いて保育者に向き合い、その促しに張り切って応じる子どもの姿、ちよつと「保育所ごっこ」のように見えなくてもその様子を見てみると、こうした経験がこの子たちに必要なことなのだと思う。こうした時間が子どもにもたらず誇りや一日の中でのめりはりが、何十人もいる園よりずっと際立って感じられた。

来年度は、卒園などで三人になってしまふという。町は、一人でも入所希望者がいれば閉所にはしないと云って来ているそうで、心強い限りだが、保育所の存続に關しては、人数の少なさなどから保護者にも気持ちの揺れはあるようだ。保育所はどうなるのだろうか。保護者が働く間、面倒を見てくれる人は、もしかしたらいるかもしれない。でも、そうではなく、保育所に通う「ハリ」みたいなものが子どもたちにあるような気がする。

今は、子どもの支援が多様化していい時代である。通りがかりの身ながら、旧来の保育所にとられず、自分たちの地域にあつた子育てサポートを実現できることを願っている。大事なことは、子どもにとって何が一番いいかということだろう。子どもは、こうしてもらうことが自分たちの育ちに一番いいとは言えない存在だから…。

私の郷里の市は、市町村合併を機に、やがて来る子ども数の減少を見越して、それまでその地域で集落に沿うようにあつたいくつかの園を閉園し、一箇所に大きな園をつくって、広域からバスで子どもを集めるようにした。いずれ減るとはいつても、現在百八十人も子どもがいては、「一人ひとりの思いを酌むどころか名前すら覚えられない」「行政は私たちの言うことなんて聞かないもの」と保育者は嘆いている。一家の兄弟数も激減し、地域の路地遊び集団も崩壊している現代に、家庭とはまた違った子どもの居場所の必要性はあるだろう。この子どもたちにはなおさらかもしれないと見学して思う。そ

れが住まいの近くに実現されたら、なおいいと思う。

### 運営は保護者が分担して

この園は、平成十二年に町立の僻地保育所として開所した。現在小学校五年生の子どもが、最初の入所児だそう。保育所運営のお金は行政が出しているが、保育者の手配、給与計算はじめ諸費用の収支など、実質的なことはすべて子どもの保護者がボランティアで分担しているという。

さまざまな計算や労働なら、面倒でも保護者が自分で買って出ることできるが、保育者として勤務することができるわけではない。保育者の手配と書くのは簡単だが、人自体が少ない地域で保育者を探すのは簡単ではないだろう。別の町から、曲がりくねった山道を片道十分ほどかけて通ってくれている保育者もいる。

### 地域の方々と

見学を始めて間もなく、某新聞社の嘱託の記者さん

が、私たちの訪問を聞き、何かイベントがあるのかと取材に來られた。來所のきっかけとイベントではないことなどを話していた際、「お昼（ご飯）どうされますか。

よかったらうちでどうですか」と誘っていた。初対面であり、はじめは遠慮したが、「この辺り、食べる所ないですよ。うちは、よくしていることだからいいですよ」と言われ、伺うことになった。

見学後、私たちはパンフレットにある柚子関連の商品を買うため柚子加工所に行く予定だった。ひなたちゃんのお母さんもそこに勤務していて、私たちを案内するために、しばらくして迎えに来てくれ、まだ見学している私たちにつき合って、子どもたちが遊ぶ姿を見ながら、私たちの質問にに応じてくれた。そのひなたちゃんのお母さんも誘われ、三人でお邪魔した。

昔懐かしいお宅の茶の間に、ずらりと並んだごちそうの数々。「何にももうて」「家で採れた野菜料理ばかり」とのことだったが、記者さんのお母さんの手料理は、お世辞抜きで本当においしかった。

そのとき、運動会は近くの廃校になった中学校跡地で、小学生、地域の方と一緒に往くことや、大人のほうが断然多く、保護者は運営の手伝いで大忙しと聞いた。

先日のひなたちゃんのお母さんのメールには、「保育所の子どもたちも、運動会に向けて練習がんばっているようです。ちびっ子が多いので大したことはできませんが……」とあって、あのでこぼこした六人が一体どんなへ練習をしてることかと、ほほ笑ましく思った。訪れたとき、廃校した中学校の跡地は、時が止まったかのようで、かつてはここに子どもたちの声が響き渡っていたのだと思うと、やはり寂しいものを感じた。今は、保育所の子どもたちの声が聞こえていることだろう。

日々の、子どもさんからの生活の延長に運動会をつなげてと思っていながらも、運動会が近づくとどうしても形や見栄えを意識して、いつの間にか子どもを追いついでしまうという保育者に、「(親子で)体を動かすことを楽しめる機会があることは大切だと思うが、別に運動会がなくても……」と言ったこともある。しかし、運動会イ

コール当然やるものという日本の《運動会文化》の存在が、ここでは子どもたちの経験の幅を広げる機会になっているような気がした。

帰路、土産物屋で、日さんが苔玉(ミズゴケをまいて作った小さな盆栽のようなもの)を買った。それを作って卸しに来た方々が、お茶を楽しんでいた。ひよんなことから、「この子どもたちに会ってきました」とパンフレットを広げると、「ああ、○さんとこの」「うちの隣です」と言う。「来年のパンフレットも子どもでいきたいですね。ひなた&ようすけ四歳になりましたとか」などと(冗談を)言つて土産物屋を出た。

若者の多くはこの地を出て、戻つて来ない。でも、おばさんたちが明るくて、しょぼしょぼしていないのがよかった。温暖な気候は、自然に囲まれていれば食べていくのに困ることはないという自信を生むと思うのは、私が雪国に生まれ育ったからだろうか。去らない人の活力を感じた。過疎の里は元氣。

(大東文化大学)